

すんずら

森野 水琴

冬の朝、一面の雪の上を沈むことなく快適に歩ける状態を、少年の住んでいる地方では「すんずら」と呼んでいる。

少年は寝ようとして、いつもより静かなことに気が付いた。音を吸い込むように雪が降っているのだろうか。

翌朝、少年は一面の銀世界に見とれていた。

まだ雪が降る中、少年は除雪された道を歩いて登校した。雪は午後には止み、夜には満天の星空。

次の朝、少年は田畠に残る雪に片足乗せた。表面が固い。もう片足も乗せた。

「すんずらだ」と叫んで少年は雪の上を歩く。祝福するように雪の精が並んで歩く。

雪の精が走り出す。

時を忘れて少年が追いかける。

走り回る少年に 雪が微笑む